日本人外科医

山形茂生・JICA ニジェール支所長（当時）

2017 年 3 月，ニジェールの首都ニアメから東へ 800km 弱離れたテッサワの町の自宅で，日本人外科医・谷垣雄三医師が息を引き取りました。弟子でかつ協力者の看護師が，外科センターでの業務を終えて医師に１日の報告を行っている際中，発作に見舞われ，介抱の間もありませんでした。76 年の生涯の約半分の 36 年間をニジェールに捧げてのことでした。

同国には，首都に数名の日本人しか住んでいません。たまたま出張中だった在コートジボワール日本国大使が，他の日本人２人とともに駆け付け，４日後に自宅庭にイスラム教式で埋葬されました。谷垣医師の墓の横には，18 年前にやはり自宅で亡くなった静子夫人（享年 67 歳）が眠っています。葬儀には，大統領の名代として出席したマラディ州知事をはじめ，約 300 人のニジェール人が集まり，ニジェールや近隣諸国からやってきた病人を献身的に治療した日本人医師の死を悼みました。

谷垣医師が私財を投げ打って，テッサワに地方外科パイロットセンターを建設し，夫人とともに移住したのは，1992 年２月のことです。それまでは，ニアメの大学病院で 10 年間，全国に３人しかいない外科医の一人として，また JICA 専門家として，ニジェール人医学生を教育しつつ，外科診療を行っていました。

その直前は，ニジェール北部の砂漠地帯で，日本企業の顧問医として鉱山開発技師の健康を守る任務の傍ら，現地の人々の診療を引き受けていました。その時の体験で，素朴なニジェール人に魅せられ，また彼らの厳しい医療事情を改善したいという熱意に燃えました。谷垣医師の献身的な姿勢がニジェール政府の目を引き，専門家としての外科医派遣が日本政府に要請され，谷垣医師はフランス語を勉強して，この要請に応え，あらためてニジェールに向かいました。この時，静子夫人も同行しました。

ニジェールは，国土の３分の２を砂漠が占め，雨も緑も少なく，暑さが厳しい。独立後まだ 20 年しか経っていなかった当時は，生活も容易でなかったでしょう。谷垣医師がその後ずっとニジェールに留まり，ニジェール人の健康のために活動を続けられたのは，夫人の支えなしに

はありえませんでした。夫人も慣れない生活の中でフランス語を学び，ニジェール人とも，フランス人や他の外国人とも打ち解けながら，滞在しました。若い頃に始めた絵画活動をここでも続け，困難な生活を乗り切りました。

専門家業務と日常生活の合間に，夫妻で砂漠も含めた国内旅行を精力的に行っています。谷垣医師はその中で，地方の医療事情をくまなく調査しています。そして夫人は，画題を求めてスケッチを続けました。砂漠旅行で見つけた印象も含め，油絵も含めた絵画を夫人は多く残しています。夫妻がまだニアメ在住中に個展を開き，作品の一部をニアメの人々が鑑賞する機会もありました。

ニアメでの 10 年で，一旦，JICA 専門家の任期が終わり，二人はテッサワに移りました。移住先は，ニジェールの人口集中地帯である南縁の中央に位置するという理由で，谷垣医師が選びました。最初は専門家の身分を離れ，個人の資格でした。日本政府は，すぐにその重要性を認め，専門家としての派遣に切り替えました。

ここで彼は，地方住民も外科治療サービスが容易に受けられるためのモデルの構築を目指しました。国の西端にある首都を離れたのも，そのためです。受益者負担による外科手術経費を抑えるために工夫をし，外科施設を維持するための適切な患者負担額を算出し，また地方外科を担う人材養成を提唱し，自らも養成を行いました。

途中で最愛の夫人が亡くなるという悲劇が見舞いました。彼女は，ニアメを離れる前から健康を失いつつありましたが，一人で帰国するという道を選ばず，最後まで夫のそばに寄り添い，精神的に仕事を支えていました。そして谷垣医師も，最後は夫人の横で永眠するという決心を固めていました。毎朝夫人の墓に語りかけることを日課とし，事故や病気で自身に治療が必要になっても，テッサワに留まりました。

テッサワでの活動の９年間で，JICA との専門家派遣契約は終了しました。しかしその後も，日本の支援者からの支援を受けながら，彼は地方外科のあり方の模索を続け，2007 年にフランス語で報告書を作成し，当国保健大臣を含む関係者大勢の前で披露しています。その後も報告書の改定を亡くなるまで続けました。

70 歳を過ぎても，センターで外科治療を献身的に続けていました。経費を下げて住民が手術を受けやすくするため，手袋は家庭用ゴム手袋，縫合糸はミシン糸を，ガーゼ代わりに日本の支援者から送られたタ

オルを使用していました。日本のテレビ局からの取材に際し，多い時で午前３回，午後２回の手術をこなし，累計で手術回数１万回を超えていると答えています。地方の一般住民に目を向けた外科治療の評判が国中だけでなく，近隣諸国にも広まり，国境を越えてまで患者が訪れていました。

　谷垣医師の死後，外科センターと地方外科改善報告書，そして夫人の絵が残っています。センターは，ご遺族の希望でニジェール保健省に譲渡され，国が事業を続けると約束しています。夫人の絵は，一部は日本に送付され，大学時代の山仲間の手で，医師の業績と一緒に多くの日本人に知ってもらおうと，日本で展示会が開かれています。